

## 「このようなことが起こる」

マルコの福音書 9:20~24

### はじめに

聖書とは、神が何を目指し、何を成そうとしておられるのか、いわゆるその仕事の事業計画とその目的、ヴィジョン、あるいはそれを表すとえ「型、ひな型」が記された神の企画書、計画書であり、やがて「このようなことが起こる。いや、わたしがこれをします。必ず成し遂げます。」という神の宣言、宣誓、誓約としての御言葉を詳細に記した誓約書、契約書です。もちろんその他の読み方、解釈も多く存在します。聖書はその読み手によって様々な側面を見せてくれます。それは神の御心を表すその御言葉の広さ、高さ、深さ、豊かさのゆえであり、あらゆる世代のあらゆる国民、民族に神の御言葉が届けられるためです。ですから今日お分かちする内容も、聖書全体のごく一部にすぎません。その事実をふまえた上で、今日も神のご計画の、その完成である「神の国、御国」の視点から御言葉を読み解いてまいりたいと思います。

### 1. 引きつけを起こす

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:20 そこで、人々はその子をイエスのもとに連れて来た。イエスを見ると、霊がすぐ彼に引きつけを起こさせたので、彼は地面に倒れ、泡を吹きながら転げ回った。

イエシュアのみもとに集まって来た群衆の中の一人が、自分の息子が汚れた霊、悪霊につかれており、それをイエシュアの弟子たちに癒してほしい、助けてほしいと求めていました。ところが弟子たちにはそれができなかった、息子に取りついたその霊を追い出すことができなかったという窮状を、今度はイエシュアに訴えました。そこでイエシュアは命じてその息子を連れて来させました。すると「その子」はイエシュアを見るや否や「**霊がすぐ彼に引きつけを起こさせ…地面に倒れ、泡を吹きながら転げ回った**」とあります。この異様な状態、状況は一体何を表しているのでしょうか。ここで「**彼に引きつけを起こさせ**」と訳されている箇所に使われているヘブル語ザアヴァー(הַאֲוָרָה)、この言葉は本来、**地上の国々、諸国の民の神に対する恐れ、おののき**を表すものとして使われました。ザアヴァーの最初の言及は申命記 28:25 です。

申命記【新改訳 2017】

28:15 …もしあなたの神、【主】の御声に聞き従わず、私が今日あなたに命じる、主のすべての命令と掟を守り行わないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたをとらえる。

28:16 あなたは町にあってものろわれ、野にあってものろわれる…

28:25 【主】はあなたを敵の前で敗走させる。あなたは一つの道から攻めて行くが、敵の前で七つの道に逃げて行く。あなたのことは地上のすべての王国にとっておののきのもととなる。

これは神である主が、モーセを通してイスラエルの民に告げられた契約の御言葉の一つです。イスラエルの民が神に逆らい、聞き従わなかった場合、神がどのように対応なされるかということがいくつも提示されており、その裁き、呪いがあまりにも恐ろしくて残酷なために「地上のすべての王国にとっておののきのもととなる。」とあり、ここに聖書で最初のザアヴァーが使われています。このようなイスラエルの民に対する神の呪いと、「地上のすべての王国」が神に対してザアヴァー、恐れおののくという二つの出来事が同時に起こるのは、聖書に預言された神のご計画において、究極的には世の終わりの三年半の大患難であり、ザアヴァーはその事実、ご計画を指し示す言葉であると考えられます。イエシュアの御前で突然引きつけを起こしたその子の姿は、おそらくその場にいた人々に恐怖を与えたことでしょう。私も以前、大勢の人が集まって祈っている中で、突然一人の女性が奇声を上げながら暴れだすのを見たことがあります。それは私にとってとても恐い経験でした。しかし世の終わりにはそれよりもはるかに恐ろしい大きな患難、ヨハネの黙示録の預言に代表されるあらゆる災い、未曾有の天変地異がこの地上を襲います。それはイエシュアを神の御子メシアとして認めない、受け入れない**イスラエルの民に対する神の怒り、呪いであり、また同時に神を信じない、聞き従わない地上のすべての国々にもたらされる恐れとおののき**です。そのような神の裁き、ご計画が、イエシュアの御前で「引きつけを起こ」させられたこの息子の中には「型」として表されていると考えられます。

## 2. 転げ回る

また「彼は地面に倒れ、泡を吹きながら転げ回った」ともあります。ここで「転げ回った」と訳されている箇所のヘブール語はガーラル(גָּרַל)と言い、その最初の言及は創世記 29:3 です。

### 創世記【新改訳 2017】

29:1 ヤコブは旅を続けて、東の人々の国へ行った。

29:2 ふと彼が見ると、野に井戸があった。ちょうどその傍らに、三つの羊の群れが伏していた。その井戸から群れに水を飲ませることになっていたからである。その井戸の口の上にある石は大きかった。

29:3 群れがみなそこに集められたら、その石を井戸の口から転がして、羊に水を飲ませ、その石を再び井戸の口の元の場所に戻すことになっていた。

アブラハムの子イサクの子ヤコブ（すなわちイスラエル）は旅の途中一つの井戸を見つけます。その井戸の口には石の板でふたがされており、羊の群れが集められた時に「その石を井戸の口から転がして」水を飲ませていたとあり、ここに聖書で最初のガーラルが使われています。ですからガーラルは本来、「群れがみなそこに集められ」ることを指し示した言葉であると考えられます。神の御子メシアであるイエシュアは、やがて再びこの地上に戻って来られます。それは国々の中に散らされたご自分の民イスラエルと、それに繋がる人々をすべてそのみもとにお集めになるためです。そして彼らの羊飼いとして、永遠のいのちの水を与え、養い、守り、導くためです。ガーラルには本来、そのような神のご計画が指し示されていると考えられます。ですから見た目には到底思いもつかないことですが、このイエシュアの御前で「転げ回った」という息子の姿には、大患難の後に**イエシュアが地上に再臨され、イスラエルの民を集められ、彼らの羊飼いとなられる**、ということが神のご計画の「型」として表されていると考えられます。

神はイスラエルの父祖アブラム、イサクそしてヤコブをして彼らの子孫イスラエルをご自分の民、神の所有の民としてお選びになりました。その選びは決して変わるものでも破棄されるものでもありません。たとえ彼らがどんなに神に逆らったとしてもです。神はついにはこの民を建て直し、その御心の中に本来あるべき姿に造り上げられます。神にとって不可能なことはありません。かつて神はアダムのお腹からでもエバをお造りになりました。この時神はアダムに深い眠りを下されましたが(創世記 2:21)、そこに使われているナーファル(נָפַל)「倒す、横たわる」という意味の言葉が、このイエシュアの御前に連れて来られた子が「彼は地面に倒れた」という箇所にも使われており、神がこのイスラエルの民をご自分の選びの民としてまったく新しく造り変えようとしておられることが表されていると考えられます。

### 3. 尋ねる

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:21 イエスは父親にお尋ねになった。「この子にこのようなことが起こるようになってから、どのくらいたちますか。」父親は答えた。「幼い時からです。」

イエシュアはこの子の父親に「お尋ねになった」とあります。はたして神の御子であるイエシュアが、人に聞かなければわからないようなことがあるのでしょうか。イエシュアは出会う前からその人の名前もどんな人物であるかもご存知な御方です(ルカの福音書 19:5、ヨハネの福音書 1:48)。そんな何も聞く必要のない御方があえて「お尋ねになった」のです。ここに使われているシャーアル(שָׁאַל)という言葉は初め、このような場面で使われました。

創世記【新改訳 2017】

24:47 私が尋ねて、『あなたは、どなたの娘さんですか』と言いますと、『ミルカがナホルに産んだ子ベトエルの娘です』と答えました。そこで私は、彼女の鼻に飾り輪をつけ、彼女の腕に腕輪をはめました。

これはアブラハムの忠実なしもべが語ったものです。彼は主人の息子イサクの妻となる人を探すために遣わされ、神は彼を「ベトエルの娘」リベカのもとへと導かれました。彼女に向かってしもべが「尋ねて…」という箇所に聖書で最初のシャーアルが使われています。このベトエル(בְּתוּרַל)とはヘブル語で「神の家」という意味です。ですからこのシャーアルには本来、神の家、神の国を尋ね求める、というような意味合いがあると考えられます。「イエスは父親にお尋ねになった」とありますが、そこにはその息子の父親ではなく、**イエシュアご自身の父親であられる天の父なる神に向かって「神の家、神の国、御国」を求める御子としての姿**が表されていると考えられます。それはまさに私たちが祈るべき祈り「父よ…御国が来ますように(ルカの福音書 11:2)」を表す姿でもあり、すべてをご存知であられるイエシュアが、あえて「お尋ねになった」ことの意味であると考えられます。

### 4. 幼い時から

またこの息子は「幼い時から」霊に取りつかれていたことが記されていますが、ここには「少年、若者、しもべ」という意味のナアル(נָאָר)という言葉が使われています。この最初の言及は創世記 14:24 です。

## 創世記【新改訳 2017】

14:16 そして、アブラムはすべての財産を取り戻し、親類の口トとその財産、それに女たちやほかの人々も取り戻した。

14:17 アブラムが、ケドルラオメルと彼に味方する王たちを打ち破って戻って来たとき、ソドムの王は、シャベの谷すなわち王の谷まで、彼を迎えに出て来た。

14:21 ソドムの王はアブラムに言った。「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」

14:22 アブラムはソドムの王に言った。「私は、いと高き神、天と地を造られた方、【主】に誓う。

14:23 糸一本、履き物のひも一本さえ、私はあなたの所有物から何一つ取らない。それは、『アブラムを富ませたのは、この私だ』とあなたが言わないようにするためだ。

14:24 ただ、若い者たちが食べた物と、私と一緒に行動した人たちの取り分は別だ。アネルとエシュコルとマムレには、彼らの取り分を取らせるように。」

これはアブラムが、ケドルラオメルという王とその軍勢から、ソドムの町に住んでいた甥の口トとその財産を奪い返した時の場面です。この時アブラムと「一緒に行動した人たち…アネルとエシュコルとマムレ」という「若い者たち」が彼とともに戦ったことが記されており、ここに聖書で最初のナアルが使われています。ですからナアルには本来、**アブラムにつき従う者、ともに働く、家族以外の者、すなわち異邦人**という意味合いがあると考えられ、神のご計画におけるイスラエルの民とそれに結びつく異邦人の姿が指し示された言葉であると考えられます。神がご計画しておられる「神の家、神の国、御国」の、その民とは、アブラムの子孫であるイスラエルの民と、それに結びつく私たち異邦人、私たち教会によって構成されます。その事実がこの「イエスは父親にお尋ねになった…父親は答えた…幼い時からです。」という一連の流れの中には指し示されていると考えられます。「神の国」はこの息子に表されたように、やがて必ず、まさに「このようなことが起こるようになってから」成就、実現するのです。

## 5. 信じる

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:22 霊は息子を殺そうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。しかし、おできになるなら、私たちをあわれんでお助けください。」

9:23 イエスは言われた。「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできます。」

9:24 するとすぐに、その子の父親は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」

「信じる者には、どんなことでもできる」と、イエシュアは確かに言われました。しかしこの「信じる」とは実際にどういうことなのでしょう。信じるといっても人はその罪のゆえに誰も神以外のものを信じやすく、また神を信じている者でさえも、実際には自分の思い描く、自分の理想の神を信じており、みな自分勝手に、自分の信じたいように信じています。つまり実際には神を信じているのではなく、自分の中にある思い、自分の理解、自分の考えを信じているのです。みなさんは神を信じておられますか？では実際に神の何をどう信じておられるのでしょうか。一度じっくりとみなさん一人ひとりが信じておられることについて自問自答してみられても良いかと思いますが、答えはやはり聖書の中にあります。

「信じる」ことをヘブル語でアーマン(אָמַן)と言いますが、この言葉が聖書で最初に使われた箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

15:1 これらの出来事の後、【主】の**ことば**が幻のうちにアブラムに臨んだ。「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

15:6 アブラムは【主】を**信じた**。それで、それが彼の義と認められた。

神はイスラエルの父祖アブラハムにこのように約束され、彼はそれをアーマン「【主】を**信じた**」とあります。これがアーマンの持つその本来の意味です。アブラハムの子孫であるイスラエル、ユダヤ人とも呼ばれる彼らが、やがて数えきれないほどの数の民となること、この約束、ご計画がアーマンという言葉が本来指し示している事なのです。ですから神を「信じる」とは、何よりもまずこの事実を真実である、確かであると「信じる」ことであると考えられます。このイスラエルの民が天の星々のように大いに増えること、これが私たちとどのような関わりがあるのかというと、それは大いにあります。なぜなら神はこのイスラエルの民によって、彼らを通して全世界の国々の民を祝福すると定められたからです。

創世記【新改訳 2017】

22:15 【主】の使いは再び天からアブラハムを呼んで、

22:16 こう言われた。「わたしは自分にかけて誓う——【主】の**ことば**——。

22:17 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。

22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。

このように、神はただイスラエルだけを祝福すると仰っているのではなく、イスラエルによって「地のすべての国々は祝福を受けるようになる」というご計画をお持ちなのです。この事実を目をとめ、実現し、完成する日を期待し、待ち望む。これが私たちの信仰、「信じる」べきもの、求めるべき「神の国、御国」であると信じます。

## 6. お助けください

そして息子の父親は、イエシュアに向かって二度「**お助けください**」と言っています。一度目は「(もし) **おできになるなら…**」という不信仰な心で言い、そしてそれをイエシュアに叱責され、二度目には「**信じます。不信仰な私をお助けください。**」と悔い改めながら叫んでいます。この様子はイエシュアに対するイスラエルの民の姿を表している「型」であると考えられます。なぜなら彼らはその不信仰のゆえに初臨のイエシュアを十字架につけたからです。その時彼らはこんなことを言っています。

マタイの福音書【新改訳 2017】

27:40 「神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」

27:41 同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスを嘲って言った。

27:42 「他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。」

27:43 彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」

「もしおまえが神の子なら…そうすれば信じよう。」このようにユダヤ人たちは、十字架上のイエシュアが神の御子メシア、イスラエルを救う王であることを認めず、これを受け入れませんでした。彼らはその歴史の中で何度も異邦人の攻撃、侵略、迫害を受け、まさに「何度も火の中や水の中に投げ込」まれるような目にあってきました。その理由はすべて神に逆らう、神に対する不信の罪ゆえの神の怒りによるものでした。彼らイスラエルの神に対する不信の罪の究極がこのイエシュアの十字架です。彼らは微塵も悪びれることなく、神の御子メシアであるこの御方を十字架にかけて殺したのです。しかしやがて終わりの日には、泣き叫びながらこの大なる罪を心から悔やみ、彼らが嘆きながらイエシュアをメシアとして仰ぎ見る日が来ます。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

12:9 その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

イエシュアの地上再臨、イエシュアがやがて再びこの地上に来られる時、この預言が成就します。しかしそれは同時に「エルサレムに攻めて来るすべての国々」とあるように、イスラエルに対する世界的な大迫害、大患難の最中であることが指し示されています。その絶体絶命の危機の中で「恵みと嘆願の霊」が注がれ、イスラエルの民はイエシュアをメシアとして認めるといふ民族的回心へと導かれるのです。このようなイスラエルの民のイエシュアに対する態度、言動の変化、神が彼らを造り変え、建て直されるというご計画が、「お助けください」と言って息子の父親がイエシュアに向かって二度求めた姿の中に「型」として表されていると考えられます。

最後に、ここに使われている「助ける」という意味のアーザル(אָזַר)の最初の言及である創世記 49:25 を見て終わりたいと思います。

創世記【新改訳 2017】

49:22 ヨセフは実を結ぶ若枝、泉のほとりの、実を結ぶ若枝。その枝は垣を越える。

49:23 弓を射る者は激しく彼を攻め、彼を射て苦しめた。

49:24 しかし、彼の弓はいつも固く張られ、彼の腕はずばやい。ヤコブの力強き方の手から、そこから、イスラエルの岩である牧者が出る。

49:25 おまえを助ける、おまえの父の神によって、おまえを祝福する全能者によって、上よりの天の祝福、下に横たわる大水の祝福、乳房と胎の祝福があるように。

49:26 おまえの父の祝福は、私の親たちの祝福にまさり、永遠の丘の極みにまで及ぶ。これらがヨセフの頭の上に、兄弟たちの中から選り抜かれた者の頭の頂にあるように。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブが、自分の12人の息子たち一人ひとりに預言し、その中でヨセフに対して語られたものです。「おまえを助ける、おまえの父の神によって、おまえを祝福する全能者によって、上よりの天の祝福、下に横たわる大水の祝福、乳房と胎の祝福があるように。」ここに聖書で最初のアーザルが使われています。このように、神がアーザル「助ける」とは、単に危機から救う、助け出すという意味ではなく、永遠に続く、これ以上ない極上の祝福まさに「永遠の丘の極みにまで及ぶ」祝福をお与えになることなのです。それは今のこの世では決して味わうことのできない「神の国」の祝福です。それは「ヨセフの子（ヨハネの福音書 1:45）」とも呼ばれた「イスラエルの岩である牧者」である神の御子メシアであるイエシュアによって与えられます。ヤコブのこの預言にはその事実が、神のご計画が指し示されていると考えられます。ですからイエシュアが私たちに「助ける」お助け下さるとは、私たち人が普通に捉えているそれとは大きく異なり、究極的にはこのような神の祝福を受けることを意味するのです。

私たちはよく自分の目の前の問題や困難の中で「助けてください」と神に向かって祈ります。そしてその問題が解決すること、あるいはその困難に打ち勝つ力が与えられることを求めます。このように、私たちの求める「助ける」と神が与えようとしておられる「助ける」とは、何と食い違っていることでしょうか。こうして私たちはいつしか神を自分の些細な問題を解決するためだけの小さな存在にできてしまっており、しかもその祈りは「(もし) おできになるなら…」というものとなっています。

しかし私たちの神は、私たちが及びもつかないはるかに偉大な御方です。そして想像を絶する壮大なご計画をお持ちで、永遠のいのちの祝福を与えようとしておられるのです。誰も上等なぶどう酒で汚れた足を洗う人はいません。お気に入りの服を雑巾替わりにトイレを掃除する人はいないでしょう。しかし実際に私たちは神に対してそのようなことを日々行っているのです。どうか神をあなたの問題解決の道具のような存在としてではなく、天と地の創造者、そして完成者、統治者としてくださいますように。そしてそのご計画を成そうとしておられる御心、み旨に目を向け、思い巡らし、寄り添うような歩み、生き方へと導かれますように。